第 15 章　始めるのは簡単、続けてきたことが成果

東北全域・ろう LGBT 東北（DEAF LGBT TOHOKU）

関内秀人（せきうちえいと）さん

実施日：2019 年 7 月 13 日　　聞き手：杉浦郁子・内田有美

実施場所：仙台市内の喫茶店

【プロフィール】

1974 年、宮城県仙台市生まれ（インタビュー時 45 歳）。ろう FtM でゲイ。「DEAF LGBT MIYAGI」および「ろう LGBT 東北（DEAF LGBT TOHOKU）」の設立からの事務局。2017 年 1 月から首都圏在住。会社員。

１．自分のこと、家族や仕事のこと

◆性別の移行

性別の移行はかなり遅く、思春期から 30 代まで LGBT 情報が中々得られなかったです。思春期、あの時代は性教育が「おしべめしべの受精、虫の交尾の話をして、性に関するものは美化するか蓋をする」といい加減なレベルだった。初潮は 19 歳。それまで自分は女なのか男なのか情報が少なすぎて全然分からなかった。

小さい時から時々「おちんちんが生えないかな？」と理由は分からず漠然と思っていた。おちんちんで性交がしたいとかではなく。今思えば当時から純粋にシンボルが欲しかったんだね。気が付かないだけで。

自分が FtM だと認識したのは、2007 年。FtM 同士の出会いでやっと自分が何者なのか悟りを開きました。

◆両親へのカミングアウト

小さい時から両親の前でも男っぽい服装や行動をしていたのですが、本家の長女だったため、ずっと「女らしくしろ」「結婚しなきゃいけないんだから」「いずれは子どもを作って」「男と女は」「普通に」などと言われていました。

2014 年 4 月 4 日に「DEAF LGBT TOHOKU」を発足したこと、私の活動のことも伝えていましたが、最初は反対するというか、何ていうのかな、見ないふりというか、見てくれない。そんなのは自分の子供がやっていることじゃない、という反応でした。表面だけ「あーはいはい」。

2016 年 3 月に「OUT IN JAPAN」の撮影会が仙台で行われ、私も参加しました。2016

年 11 月 3 日から 15 日に、そのポートレートの写真展が多賀城市図書館で開催された時、両親に「図書館の 3 階に行ってみて」と内容は伝えずメールをした。両親は行ってくれました。行ってみると「あれ、娘がいる」。その写真に添えられた私の文章を読んで、2 人とも「うん？」と固まってしまったらしい。お互い 2 回ほど「うん？」と見合った形になったと、後から聞きました。それから、他の写真と文章を読んで、「あ、こういう人たちがいるんだ」「別に我が子だけがおかしいわけじゃない」と思ったそうです。

両親たちは今まで「何か頭の方がおかしい」「病院に連れて行かなきゃいけない」と話していたらしい。テレビでも LGBT のことが取り上げられるようになって「もしかしたら我が子もそうなんじゃないか」と 2 人とも心の中では思っていたらしいが、親としては認められない気持ちがあった。「いや、違う」「そうではないだろう」と。でもポートレートの写真展を見て、納得せざるを得なくなり「自分の人生だから好きに生きなさい」という連絡が届きました。

その後は、活動のことが新聞に載ったりした時には、必ず親に知らせるようにしています。返事はないのですが、反撃は来なくなりました。以前は「それは何だ」「そんなことをして」という反撃が来たのですが、今はそういうこともなくなったので、大丈夫かなと思います。

去年、性別適合手術をしたこともきちんと連絡をしました。「家族の中で 4 人目の男性だね」と言われた時は嬉しかったですね。父、兄、甥がいて、私が「4 人目の男性」というふうに言ってくれて「あ、認めてくれたんだ」とすごく感激しました。

◆花の都、大東京へ

マーケティング職・介護職を転職し、2007 年 4 月から事務職につきましたが、外資系企業のおかげで男女ともにマナーのある服装なら自由と言われたので、男物の黒や赤Ｙシャツ、そしてオーダーメイドスーツにネクタイをするようになりました。

2015 年、東京へチーム移転があり、懇意にしていたＴ上司も東京の職場に行きました。頭が切れて仕事のできる人で、私の悩みもすぐに解決してくれ、頼りになる。カミングアウトした時も「服装や容姿で何となくそうじゃないかと思ってたけど、あなたはあなただ。この先治療とか大変かもしれないけど、できることがあったら何でも相談してくれ」と。その後、私だけ仙台に残されて、仕事の物寂しさ、物足りなさがありました。そのＴ上司の下でもっと勉強したい、働きたいと思い、東京に移れないかと相談し、2017 年 1 月異動しました。

今、Ｔ上司の下で働いてすごく楽しいです。でも、Ｔ上司ももう 60 歳。65 歳以降再雇用もないとなると、残り 5 年です。Ｔ上司が辞めた後、仙台に帰りたいなという気持ちがあります。正直に言うと異動して 3 年目なのですが、首都圏の住みにくさを感じます。やはり生粋の仙台っ子なんでしょうね。それに、仙台の LGBT イベントや用事の都度戻らなければならないので、首都圏で友達を作りにくい。顔を合わせたところですぐに仙台に帰らなきゃいけないという後ろめたさがありました。1 か月に 1 回以上帰っていますからね。それじゃあ仙台に戻った方がいいのかな、と悩んでいるところです。

２.「DEAF LGBT TOHOKU」設立の経緯

◆「セクシュアルマイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会」に参加

「DEAF LGBT MIYAGI」発足のきっかけになったのは、2013 年 10 月 12 日から 13 日に大阪で開催された「セクシュアルマイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会」というイベントです。

このイベントは Facebook の広告欄で偶然知りました。デカデカと「情報保障付」とあり目を引きました。よく見ると「手話ろう！！ろう LGBT」（10 月 13 日 10:00～12:00）という、山本芙由美さんが主催した分科会がありました。今まで LGBT 大会に情報保障が付くことはなかったので、これは行かなければと思いました。知り合いを誘ってみたのですが、誰も行かない、行けないので単身参加しました。LGBT イベントに参加したのはこれが最初でした。

全国大会のパンフレット

この分科会には全国からろう当事者がたくさん集まっていました。定員は 30 人だったのですが、それを大幅に超えて 70 人はいました。会議室が満杯になってしまい、入れない人がいて不満が出ていました。エアコンの設定温度をかなり下げても全然効かないくらいの熱気でした。その分科会には、関西で活動している方、東京から来ていた方が多くいました。確認したところ、東北からは私だけ。北関東や東北の参加者は、私以外にはいない状態で、分科会の半分ぐらいは、大阪からの参加だったのではないかと思います。やっぱり関西は強い。

会場が満員に

休憩中に分科会を主催した山本さんから「東京にはクリスタルコミュニティという、ろうのゲイたちが集まる手話サークルがある。でも東北にはない。どうやって東北に LGBT 情報を届けたらいいのか」という話をされました。「せっかく来ているのだから、あなたが団体を作ったら良い」と背中を押されました。私も分科会に参加して「LGBT にもろう者がこんなにいる」「宮城にもいるんじゃないか」「他のろう当事者にも LGBT 情報を伝えたい」というふうに考え方が変わりました。

山本芙由美さんと

◆DEAF LGBT MIYAGI のロゴ

大阪の全国大会の熱が冷めない内に泉之介（せんのすけ）と話を煮詰め、2013 年 10 月 31 日「DEAF LGBT MIYAGI」を起ち上げました。ロゴマークを作る時、陰陽思想「この世は陰と陽の二つの要素から成り立っている」の考えが今後の LGBT 活動につながるとひらめき、『陰陽太極図』をもじったアイディアが浮かびました。円の白い部分が陽。陽の中に陰があるのではなく、小さなレインボーカラー。陰とい

DEAF LGBT
MIYAGI
ロゴマーク

うと一般的には暗いイメージだけど、それをレインボーカラーに変えることで、暗くない LGBT の世界というイメージを込めました。そして、陰の中にも陽があることで「希望」というイメージでデザインしました。

◆顔と名前を出して活動する覚悟

活動を始めるにあたって、情報を得るためにもう 1 人、手話ができる健聴者が必要になり一本釣りしました。ゆいと言う、サバサバした子で、当事者ではなくアライです。ろう当事者が東北にもいることをきちんとアピールするために表に出ていく目的を共有していました。「東北にも聞こえる人だけでなく、聞こえない人、見えない人、車いすの人など障害者にも当事者はいるんだ！」をもっと発信していかないといけない、と考えていました。以前は発信がまったくなかったですから。

設立メンバー

泉之介とゆいと顔と名前を出して活動していくことを確認し合いました。そうすることで「これまでのことを知られても構わない」「何を言われても構わない」という覚悟をもって仲間探しをしました。そうしないと仲間を見つけられない、誰も集まらないと思ったんです。「活動をしていくには、批判を跳ね返せるくらい強い精神力が必要なんだ！」という思いで活動を始めました。

顔を出して活動

◆仲間づくりからスタート

その時はまだメンバー3 人とも LGBT の知識がなかったため、活動というより、とにかく「仲間を探す」「仲間作り」からスタートし、そのための飲み会を企画しました。それが 2013 年 11 月でした。

飲み会は、宮城県に住んでいる人だけに呼びかけました。前から当事者ではないかと思っていた人に声をかけて、1 回目は 8 人ぐらい集まったと思います。「やりますよー」「いえーーっ」とすぐに集まったわけではなくて「もしかして仲間なんじゃないか」という人に色々な方面からアプローチして、うまく伝えて、結びつけていった。LGBT という言葉もテレビでぼちぼち出始めた頃でしたが、みんなまだまだ慎重で、警戒しているような状態でしたので。参加者は、全員がろうではなく、ろう当事者を知っている聞こえる当事者などでした。

仲間もいないのに活動なんて限界がありますから、次の飲み会、その次の飲み会と続けながら、仲間を 1 人ずつ 1 人ずつ増やしていきました。でも、団体を発足したことは、飲み会では話題にしませんでした。「活動」と言うとみんな敬遠して「行かない」となるんです。みんな遊びたいんでしょうね（笑）。

DEAF LGBT TOHOKU に会員制度はないです。一緒に活動をしてくれる人、してくれるだろうという人が、ろう当事者とつながっています。

◆DEAF LGBT TOHOKU のロゴ

DEAF LGBT MIYAGI は、宮城だけをターゲットにした団体でしたが、他のろう当事者から宮城だけの活動ではなく東北に広げてほしいという要望があり、2014 年 4 月 4 日、DEAF LGBT MIYAGI から DEAF LGBT TOHOKU に生まれ変わりました。

新しいロゴ

新しいロゴを考えていた時、「東北のろう当事者は批判や差別を恐れなかなか表に出ない、出にくい、消極的な人が多いというイメージがある。スタッフ我々はどんな批判を浴びても折れない、くじけない、そういう心構えが必要だ」と思い、麦をモチーフにしました。

『はだしのゲン』から着想（©中沢啓治/中公文庫『はだしのゲン』より）

麦は育つために 1 回踏まれないといけない。踏まれて茎が折れた部分からデンプンが大きな力を発揮して茎が更に丈夫に育つ「麦踏み」がある。そこで、「批判を受けても負けずに強い気持ちを持って立ち上がり、大地に根をはり、更に大きくなって行こう」という願いを麦に込めました。麦踏みというのは、『はだしのゲン』の場面から着想を得ています。「被爆者に対する批判や差別に負けないように麦のような強い気持ちを持とう！」というシーンに影響を受けて、モチーフにしました。

また、ロゴの中央に鳩がいますが、鳩は平和を呼ぶ鳥です。「麦と一緒に LGBT 仲間を多く呼び寄せよう、LGBT の世界に平和を呼び寄せよう」という思いを込めています。単なる鳩ではなく LGBT らしい鳩が良いと思い、レインボーカラーにしました。

◆周囲の反応

宮城県聴覚障害者協会や仙台市聴覚障害者協会、宮城県手話通訳問題研究会や青年部、手話サークル、行事などで、DEAF LGBT TOHOKU の宣伝を沢山してきました。パワポで動画を流したり、『サポートブック』（後述）を配布したり。最初は面白がっている人や冗談だと思っている人、深く追及したり、攻撃したりする人などいました。

正しい理解のために

特にろう高齢者達から「おまえたちはホモなのか？」「おかまか？」とストレートに言われたり、差別的な手話を使われたりしました。そういった差別的な手話をやめさせたかったのですが「すぐにやめさせるのは無理だな」と思い、まずはきちんと理解をしてもらうための説明をすることから始めていきました。今は、表面上は理解してくれているような気がしますけど、確実な理解にはまだまだ至っていないかな。でも、そういうことはあまり気にしません。いちいち気にすると、続けていけないですから。

ろう者と関係のある「聞こえる人」といえば、やっぱり手話通訳です。彼らは私達の一番身近にいる聞こえる人です。あとは学校関係者、職場の同僚などです。若い人はけっこう理解が早くて大丈夫でしたが、

少し年配の方は抵抗を感じて、自分とは関係のないものとして扱う、壁をつくる傾向がありました。今は社会の理解が進んで、その様な傾向も和らいでいるはずだと信じたいです。

３．血より濃い DEAF LGBT TOHOKU ファミリー

兄弟の杯を交わした DEAF LGBT TOHOKU ファミリーは 6 人いました。今は 5 人です。

◆年子の弟

聴覚障害者協会青年部のイベントを通して知り合いました。ファミリーの中では一番付き合いが長く、同じ趣味仲間でとっても気が合います。ただ彼はカミングアウトしていないので、裏方や縁の下の力持ちとして色々助けてもらっています。

年子の弟

◆しっかりしすぎる弟

仙台にはもう一人、矢口泉之介という、ろう FtM がいました。彼と出会ったのは 2007 年。隣県のろう友達の紹介で仙台に越してきたばかりの彼と会ったのですが、第一印象は「同じ匂いがする？」。彼はもう FtM として生きていたので色々な LGBT 情報をくれました。宮城県聴覚障害者協会青年部長・手話サークル会長・DEAF LGBT TOHOKU 代表と 3 足ワラジで頑張ってもらいました。一時は大喧嘩もしましたが、お互い悪い所・良い所を認めあっている仲です。

しっかりしすぎる弟

◆やんちゃな弟

DEAF LGBT TOHOKU が活動したばかりの頃、東京から戻ってきたコータと出会いました。彼は全国のろう者人脈がとてもすごいので宴会部長を任せていますが、用心棒みたいでとても心強いです。

やんちゃな弟

◆甘えん坊な弟

岩手県在住のまーくんです。彼とは東北ろうあ者大会青年部などで見かけたものの、お互い知らない状態だったので「随分大きなあんちゃんだなー」と（笑）。今は、二代目としての今後の DEAF LGBT TOHOKU に期待しています。

甘えん坊な弟

◆おしゃれで向上心が高い弟

彼とは DEAF LGBT TOHOKU のイベント時、某団体主催のスタッフで出会いました。ものすごいおしゃれ好きで派手です

向上心が高い弟

が、カミングアウトしていないので、裏方などに徹してもらっています。

４．聞こえる LGBT 団体との関係づくり

◆つながる必要を感じていた

東北地方の LGBT 団体にはなかなか入りづらかったです。私は声は出せるのですが、聞こえない。相手の言うことだけが分からない、というのがフラストレーションになっていました。初対面の人に「筆談して下さい」とお願いすると相手が引いてしまうこともありましたし、筆談が面倒だと感じていることが相手から伝わってくることもありました。

「聞こえる LGBT 団体」という言い方はおかしいのかもしれませんが、聞こえる LGBT 団体はろう団体にくらべて本当に沢山あるし、規模も大きい。そういう団体と繋がっていく必要性を十分感じていました。自分たちだけでは、何か壁にぶち当たった時、いとも簡単に潰れてしまう。継続するために、問題を解決するためには、他団体や活動家と繋がっていかなければいけないと思っていました。

それで、まずは顔を売ることが大切だと当時の代表泉之介と確認しました。泉之介はイケメンで社交性があり、話しかけやすい人でしたので、彼のおかげもあってドンドン健聴者たちと繋がっていくことができました。

◆つながるためのツール『ろう LGBT サポートブック』

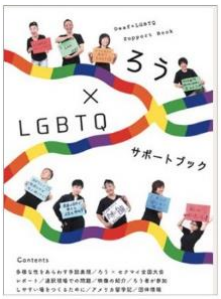
『ろう LGBT サポートブック』（新設Ｃチーム企画・2014 年 3 月発行）が他団体とつながるための 1 つのツールになりました。

2013 年 10 月の「セクシュアルマイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会」のとき、LGBT の手話表現について検討したんです。LGBT に関する手話は自分たちで作ったものを内輪のやりとりで使っているだけで、それが全国に周知されていませんでした。大阪の分科会はきちんと専門用語を作って広めたいという機運が背景にあって開かれました。当大会では大阪の人たちが中心になって作った「LGBT 基本用語手話表現」という資料が配布されました。その内容を充実させたのが『ろう LGBT サポートブック』という冊子です。

つながるためのツール
『ろう LGBT
サポートブック』

最初は、その冊子をろう関係者、例えば宮城県や仙台市の聴覚障害者協会、難聴協会などに配布していきました。ただ、やはり聞こえる団体とも繋がらなければいけないと思い、サポートブックを持って他団体を回りました。仙台で活動をしている小浜耕治さん（本冊子にインタビュー掲載）や、秋田 ESTO の真木柾鷹さん（本冊子にインタビュー掲載）の主催するイベントなどに参加しては、「実はこういうものがあるんですよー」と渡していきました。

2018年5月に新たに『ろう×LGBTQサポートブック』(Deaf LGBTQ Center 発行）が配布されました。YouTube 動画もあるので是非見てほしいです。『ろう LGBT サポートブック』『ろう×LGBTQ サポートブック』はどちらも大阪で制作しています。やはり行動力がある関西はすごい。



『ろう×LGBTQ
サポートブック』

5．ろう×セクシュアルマイノリティ全国大会

◆第 1 回の東京（2015 年 6 月）

「第 1 回ろう×セクシュアルマイノリティ全国大会」（2015 年 6 月 21-22 日）には、メンバー2 人で参加しました。すごい数の参加者でしたよ！　でも参加条件が厳しかった。まず、ろう当事者であること。健聴当事者はお断りでした。ただし、ろう当事者の家族の場合は OK。さらに、手話の読み取りが容易にできる人という条件もありました。つまり、読み取り通訳の情報保障がない。でも、情報保障が付かないかわりに、参加費が安い。通訳をお願いして参加費が高くなってしまうと、参加者が少なくなってしまいます。情報保障を付けずに行われ、100 人を超える参加があったと思います。メンバーの 1 人はアライで、参加条件に合わず、泣く泣く不参加だったんですよね。

第 1 回ろう×セクシュアル
マイノリティ全国大会

この全国大会が開催されたのは「セクシュアルマイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会」第 2 回（2014 年 10 月 11-12 日・大阪）の分科会で誰かから「全国ろう者大会があるのに、ろう LGBT 全国大会がないのはおかしいよね」「もっと手話で専門的に討論したい」という声が挙がったからです。山本芙由美さんが「やりましょう！」と言って、みんなも「おおっ」と賛同して、東京での開催が決まりました。山本さんは大阪人ですごく積極的。こちらがタジタジになるくらいの感じなのですがその熱心な活動がなければ、成功には至らなかったと思います。

その時「2 回目は東北で」と言われました。当時はまだ大阪の団体「Deaf-LGBTQ-Center」は発足しておらず、「DEAF LGBT TOHOKU」の設立のほうが先だったので、頼まれてしまいました。「2 人しかいないのに無理です」と言ったのですが、うま～く丸め込まれてしまって開催することになりました。

第 2 回は東北で開催することに

◆第 2 回の仙台（2016 年 11 月）

第 2 回は 2016 年 11 月 12 日から 13 日に仙台で開催しました。2016 年に開催するのならいつでもＯＫということで、会場の都合で 11 月になりました。1 日目と 2 日目が別会場になってしまったのですが、何とか開催することができました。

仙台で開催するにあたって地域性が必要だと言われました。「DEAF LGBT TOHOKU」

の色を出してほしい、東北らしさをアピールしてほしい、と言われました。それが一体何なのか、そこから悩みが始まりました。仙台で他の LGBT 団体はどんな感じなのかを調べても、中々ヒントは無くて……。

ただ小浜さんが HIV/AIDS 予防活動を仙台ですごく積極的になさっていました。第 1 回全国大会では HIV の分科会はなかったので、分科会の講師をお願いしました。分科会では HIV・手話表現・災害の 3 つのテーマを取り上げました。

第 2 回のパンフレット

HIV の分科会は、参加者の皆さんも知らないことが多かったです。予防のための対策なんて必要ないと思っている人、間違った情報をもっている人もいたので、正しい情報を提供できて良かったです。「東北でやって良かった」「東北らしい」と言ってもらえました。

災害の分科会は、泉之介が担当したので、どんな様子だったのかは、ちょっと分からないです。私自身のことで言えば、「東日本大震災の時に何か困ったことはなかったか？」という質問をよく受けていますが、実は、そんなに困ったことってなかったんですよ。男性ホルモンを投与していたら確かに困ることも多いのですが、たまたま私も泉之介も、まだ治療をしていませんでした。困ったことと言えば、ガソリンが無いとか、情報が把握できないくらいで、避難所にも行きませんでしたし、当事者だから困ったことは特に無かったんですよね。きちんと考えないといけない課題ですね、これは。

◆参加条件

第 2 回全国大会の参加条件は、第 1 回と同じです。少し困ったのは、手話通訳から参加希望があったことでした。参加したいと言われて断ったのですが「どうしても」と粘られました。勉強したいという気持ちはわかるのですが「ごめんなさい、今回はそういう条件なんです」ということで、最終的にはお断りしました。

「東北らしさ」を

お断りすることについては、最初は違和感がありました。でも、本部に相談をしたら「条件は変えない」と言われてしまって。本部からは「全国大会とは別に、DEAF LGBT TOHOKU として地域で勉強会を開いたらどうですか」という提案がありましたので、全国大会の参加については断ることにしました。

この参加条件のメリットは、手話で思う存分やりとりができること。腹を割って何でも話ができること。健聴者がいるとやはり気を使ってしまう、遠慮してしまうのでこの点は大きなメリット。「健聴者は分からないかもしれないけれど、ろう同士なら分かり合えることがある。ろうだけで話したい。そういう場がほしい」というニーズはあります。そういう場に健聴者が入ってくると、少し空気が変わってしまう。ろう LGBT だけの全国大会はこれしかないですし、ろう者の情報共有の場を維持するのは大事なことだと考えています。

また、ろう者がいる家族の場合、健聴者でもろう当事者の気持ちが分かる。家族は感覚的に分かってくれるので、参加 OK なんです。とはいえ、家族の参加はそんなに多くないです。今までの全国大会で見てきた中では 3 人です。今後もっと家族の方に大会に参加して

頂き、家族にしか分からないこと、家族のサポートとは何かを話し合える場を設ければ、他の家族たちへの認識度が更に上がるのではと期待しています。

大阪で開催された第 3 回からは、ろう当事者のパートナーであれば健聴者でも参加できるようになりました。

「ろう×セクシュアルマイノリティ全国大会」開催地一覧

	開催地	開催日
第 1 回	東京都港区	2015/6/21-22
第 2 回	宮城県仙台市	2016/11/12-13
第 3 回	大阪府大阪市	2017/12/2-3
第 4 回	石川県金沢市	2018/10/20-21
第 5 回	福岡県福岡市	2019/11/2-3

◆新しい LGBT 手話表現の作り方

新しい LGBT 手話表現は、今の時代、言語にもとづいている手話表現かどうかを、みんなで話し合って決めていきます。仙台の全国大会で私が司会をした分科会でも、みんなで意見を出し合いました。でも本当に議論が白熱するので、全国大会だけでは時間がぜんぜん足りません。新しい手話が確定するまでに、最低でも 1 カ月はかかるようなペースです。

段取りとしては、全国大会が開かれる前に分科会の座長が全国のろう者や手話通訳を集めて討論をして、案をつくる。それを全国大会で配布して、参加者たちに説明して「これでいいでしょうか」と同意を求める。ただ、やっぱり反対はかなり出るんです。「それではおかしい」「変だ」というふうに。座長が「じゃあどうしたらいいでしょうか」と参加者に投げると、みんなが「これがいい」と提案するのは、結構全国共通していたりするんです。「じゃあこれで良いですね」とすぱっと決まるものもあれば、揉めるものもあります。

過去の資料を見ると、懐かしいなと思う表現がありますね。この資料に掲載されている「LGBT」は、今では使わないものですね。表現が変わってきているものもあります。最初に作ったものは、関西のほうで原案が話し合われたのですが、全国大会も 2 回目、3 回目になってくると、だんだん関東のほうも幅を利かせてきました。大阪弁と仙台弁の違いのような感じで、「こっちのほうがいい」「このほうが自然だ」という表現が地域ごとに出てくるんです。そのあたりは柔軟に変更しています。でも基本的に手話は多様なので分かりやすいようにどんどん変わっていくのは当たり前。

全国を見渡すと、関西はどちらかというと、アメリカ手話を基にして表現を作っているのが多い。でも、関東は日本手話を基にした分かりやすい表現を出してくる。例えば「パンセクシュアル」は、関西は「胸に手形をパンと添える」アメリカ手話の表現。関東は「パン（汎）」を意味する「何でも」「誰でも」の日本手話。ただ「何でも」を表す手話は両手を使わなければいけない。胸に手形をパンと添える関西のやり方は片手でできるので、私はその方が楽なんです。その点を重視して関西の表現を支持したのですが、絶対にどちらか 1 つにしなければいけない、というこだわりはないです。

決まった手話はサポートブックで広まっていますが、サポートブックだけでは限界があります。写真だけでは動きが見えないですよね。ろう者は「こんな感じね」と感覚的に分かっても、健聴者にはなかなか伝わらないので YouTube で動画が配信されています。「LGBT」や「性」など良く使う言葉は広まってきていると思いますが、代表的な言葉ぐらいで細かい手話の普及はまだまだです。勉強会が必要だと思います。

６．ろうの世界

◆ろうのダークワールド

ろうの世界は健聴に比べて非常に狭い。そしてろうの人たちは、と～ってもうわさ好きです。うわさが広まるのは本当に早い。今こうやって話したことが、明日にはみんなに知れ渡っているくらい。「知ってる？　あの人ああなんだよ」ということが、もうどんどん広がります。本当に怖い（笑）。ろう同士は会いやすいし、会って何を話すかといったら、人のうわさですよね。たっぷり尾ひれを付けるので嫌になる。明日は我が身。

だから当事者だと吊し上げられないよう隠すしかないんですよ。カミングアウトできないし、自動シャッターが起動する。ろうの行動範囲は狭いし、どこかに行くと必ずろう者がいて目に付けられやすい。カミングアウトしていないろう当事者に会う機会も沢山ありますが、そういう人たちを LGBT の世界に引きずり出すのは、本当に大変です。

◆ろう LGBT

個人的な統計ですが、「ろうレズビアン 1 人：ろうゲイ 4 人：ろうバイセクシュアル 1 人：ろう FtM2 人：ろう MtF1 人：その他 2 人」な感じです。ろう者 7 人に当事者が 1 人いると言われています。

◆ろうレズビアン

ろうの中では、レズビアンの方があまり表に出て来ないですね。女性同士のいざこざが結構多くて、批判を受けやすいので、そのせいなのかなと思っています。若い人たちも批判を恐れています。

でも明日、ろうのレズビアンの人が東京から来てくれます。「せんだいレインボーDay 2019」（2019 年 7 月 12、13 日）のために！　その前の青森レインボーパレード（2019 年 6 月 30 日）も一緒に歩きました！　その人は苦労人だけど「何でも来い」「どんな批判でも受けてやる」と肝が据わっていて、本当の強さを持っている人です。カミングアウトもしていますし、東京の人の中でも飛びぬけた強さをもっている TON 姉御です。

TON 姉御と

◆ろうゲイ

ろうゲイは関東にものすごく多いし、歴史も古い。そして面倒見が良い兄貴が多い。カミ

ングアウトしている人は 7 割ぐらい。首都圏にいる間は兄貴たちに何かと相談に乗ってもらえるので本当に頼もしいです。

◆ろう FtM

ろう FtM は未治療、戸籍変更、結婚、離婚など色々経験されている人がいます。ろう FtM 10 人中 9.5 人が女性好きです。男性が好きなのは 20 人中 1 人位。私のようにろう FtM でゲイなのは、ろう FtM の中でも珍しいケースです。

◆ろう MtF

ろう MtF も FtM 同様、色々経験されている人ばかりです。ろう MtF にもビアンの方がいます。そして何といっても全員お綺麗。自分磨きに手を抜かないところは、私も見習わないといけないですね（笑）。

◆手話通訳

手話通訳の中にも当事者がいます。カミングアウトしている手話通訳は、ろう当事者にとって最大の理解者です。イベントや飲み会では引っ張りだこです。

◆情報保障

個人的に大変なのは、相手がコミュニケーションを諦めてしまい、その場からいなくなってしまうこと。コミュニケーションを面倒臭がられてしまう。東北だと、聞こえないというだけで、連絡が途絶えて、関係性が切れてしまったりします。でも、東京の人はコミュニケーションのしづらさを、東北の人より気にしない。東京のほうがいろいろな人と付き合いをする、という意味で、人付き合いの豊かさが違うのかな。東北は、東京に比べるとお付き合いの仕方が浅いのかなと思います。

LGBT に関する情報取得の難しさはあります。例えばホームページを見れば情報は得られますが、講演会では手話通訳がなければ内容が分からない。質問もできない。私も講演を見ながら「何となくこういうことを言ってるのかな」と思っている時がよくあります。だから手話通訳による橋渡しが必要なのですが、手話通訳を呼ぶとお金がかかります。主催者に手話通訳をお願いしていいのかどうかも気を遣いますし、自分たちで負担するのも大変。ボランティアで手話通訳をお願いするのも難しいです。その人にも生活があるわけですし、それを優先してもらいたい。そうなると、なかなか気軽に声を掛けられないです。

例えばパレードの時も、手話通訳がほしいんですよね。みんなが盛り上がっていても、何で盛り上がっているのかが分からないんです。周りが盛り上がる分、こっちは意味が分からないのでキョトンとなるか盛り下がる。「今何が起こってる？」「こうだよ！」「〇〇の曲で盛り上がっているよ！」などと伝えてもらって、その盛り上がりや感動を一緒に感じたいですね。

この間の「青森レインボーパレード」（2019 年 6 月 30 日）は、手話通訳が 2 人ついたんです。たまたま私たちがいちばん前で横断幕をもって歩いたのですが、すぐ目の前にマイク

をもって PR する主催者がいて、その内容を「今こういうふうに言っていますよ」と伝えてもらえた。「こんなこと言っているのか！」とすごく良かったです。

コミュニケーションや情報の取得の問題は大きいです。他の LGBT 団体と連絡を取り続けるのは、やっぱり手話通訳がいないと大変なんです。色々な面でお互い協力して、連携してやっていきたいと思っていますが、そのためには情報の共有、情報保障が必須。音声を文字に変換するアプリなどを活用しながら、柔軟に対応してもらえるとありがたいです。

７．これまでの活動をふりかえって

◆なかなか出て来てくれない、東北ろう当事者

2017 年 1 月に私が仕事の都合で首都圏に引っ越すことになり、その前に泉之介も関西へ引っ越すことになった。「これはもう DEAF LGBT TOHOKU が潰れるんじゃないか？　どうする？」と悩んだ時、まーくん（本冊子にインタビュー掲載）が候補に挙がりました。彼はもうカミングアウト済なので白羽の矢を立てました。最初は逃げ回っていましたけど、何とかなだめて、その気にさせて（笑）。「イベントの時はちゃんと帰る」「君をフォローする」そうしたら、まーくんも「んーー、それなら良いよ」と。そう言ってしまったものですから、約束した以上は守らなければ。この 3 年間、打合せやイベント時は、ちゃんと帰ってきています。何だかんだ言ってまーくんが代表を引き受けてくれて、ホッとしています。今後の彼の活動に期待大です。

イベントのブースで

「DEAF LGBT TOHOKU」の事務所は仙台市です。でも現在私は首都圏、2 代目代表のまーくんも岩手なので、実は仙台で会うのも大変なんです。宮城県以外の 5 県にいたっては、LGBT イベントの数が仙台と比べるとそこまで多くないので、ろう当事者たちの実態がつかめていません。活動の場を広げていきたいのは山々なのですが……。

2 代目代表のまーくんに期待

イベントや勉強会を開催しても、ろう当事者のみんなは「えー、そういうのはちょっと」と言ってなかなか出て来てくれないし、出て来てもアウティングを恐れて慎重になっている感じです。2014 年 11 月宮城県大和町で LGBT 勉強会をした時は参加者ゼロ。仕方ないのでスタッフがサクラになって、席を埋めてくれましたが、皆さん、なかなか出てくる勇気がない。時間をかけてやるしかないですね。

出前講座

◆東京への流出

それから、みんな東京に出ちゃうんです。当事者にとって東京は住みやすい。新宿二丁目や同性パートナーシップ制度なんかができてくると「やっぱり東京がいいな」で移ってしま

います。東北にはそういう制度がないので、地元に愛想を尽かして東京に行くという人もいます。トランスジェンダー関係も仙台裁判所は意外と厳しいです。関東や関西は緩めなのに。

健聴者のゲイ同士ビアン同士 FtM 同士などの出会いも関東の方が多い。宮城では出会いアプリを使っても少ない。首都圏でアプリを使うと、時間単位で更新されるくらい、本当に色々な人がリストに挙がってきて、まーくんがすごくうらやましそうに見るんですよ（笑）。

東京は LGBT 人口が多いので森の中に木の葉を隠せる。でも東北だと隠れる場所が少ない。田舎の方だと尚更。木の葉をどこかに置こうとしてもすぐ見つかってしまう。だから私みたいに厚かましさがないとカミングアウトできないのかな。周りから攻撃を受けるの怖くて、仮面をかぶっている人が多いのかな、と思ってしまいます。

◆活動の成果

「DEAF LGBT TOHOKU」を起ち上げて、それが今日まで継続できていること。始めるのは簡単ですが、それを継続していくのは本当に大変なこと。「つぶれてもいい」「辞任する」と思うのではなくて、細々とでもいいので、頑張って何としても活動を続けていく、というのは重要なことですよね。だから 1 年 1 年の積み重ねで続けている、ということが私たちの成果です。

正直なところ、お金もかかるし、どうやって人を集めていくかとか、悩みは尽きない。どういう企画を立てようかと考えるだけでも大変。自分の仕事や生活もある。首都圏と仙台の往復も大変なので仙台や東北のろう当事者に活動を譲りたいのですが、なかなか。まーくんと「私たちで終わりかな」という話をたまにします。「2 人だけでヨボヨボになってやっていくのも苦しいしね」って（笑）。でも、活動を続けていく中で、今まで隠れていた人に出会えて、仲間になってくれるのは、嬉しいことです。表立ってカミングアウトできなくても、裏でつながれているだけでも十分です。

いつか仙台で喫茶店を開き、聞こえる当事者も聞こえない当事者も安心できる場所や情報を提供できたらいいなと夢見ています。

他団体や活動家との繋がりや縁を大事にし、ろう当事者たちやアライたちと共に笑いながら、今日を明日を精一杯生きたいです。

続けてきたことが成果